

Kappa Novels



この本をお読みになった方へお願い

あなたはこの本を読まれて、どんな感銘を受けられたでしょうか。「読後の感想」を左記াতেにお送りいただけます。なお、このほかにも、「カッパの本」ではどんな本を読まれたでしょうか。このつぎには、どんな本を読みたいとお考えですか。

この本には、一字でも誤植がないようにと願っておりますので、もしも、お気づきの点がありましたら、あわせてお教えください。お手紙には、ご職業や年齢なども書きそえてくださいませんか。

東京都文京区音羽二の十二の十三

光文社

神吉晴夫

長編推理小説 ^{やみ}闇 ^{こう せき}の航跡

昭和42年7月1日 初版発行
昭和43年12月20日 20版発行

検印廃止 定 340

著者 ^{くろ}黒 ^{いわ}岩 ^{じゅう}重 ^ご吾
大阪府堺市上野芝八丁 332-5

発行者 神 吉 晴 夫

印刷者 磨 田 照 雄
東京都文京区水道 2-4-26
慶昌堂印刷

発行所 東京都文京区音羽2 株式会社 光文社
振替東京115347

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。(関川製本)

表紙の模様・意匠登録 116613

© Zyūgo Kuroiwa 1967

長編推理小説

闇^{やみ}の航跡^{こうせき}

黒岩^{くろいわ}重吾^{じゅうご}



カッパ・ノベルス

目次

不思議な肌 はだ	5	ホテルの会話	151
灰の底	24	役者仲間	169
秘書の仕事	43	悪の感傷	187
疑惑の前と後	61	弁護士の意地	205
見えない敵	79	天命教の信者	222
闇 やみ からの声	96	義兄弟	238
老猿 ろうえん の脂 あぶら	114	西成 にしなり の火事	253
策謀 さくぼう と罠 わな	133	闇 やみ の囁き ささや	268

本文のイラスト
進藤 信一

この『闇の航跡』は、光文社のカッパ・マガジン「宝石」に、昭和41年4月号から42年7月号まで連載されたものです。

（編集部）

不思議な肌^{はだ}

高倉精一^{たかくらせいいち}が杉岡田^{すぎおかた}と知りあったのは昭和二十八年だから、もう十年以上も昔である。

当時高倉は二十六歳、新興宗教天光靈会^{てんこうれいかい}の教祖小川良乃^{おがわらよ}の秘書をしていた。

天光靈会と言っても、当時はまだ一般にはさほど知られていない。が、その御利益^{ごりえき}については、信者の間では絶対的な信仰を受けていた。

当時、小川良乃は三十を過ぎたばかりで、色が白くぼつちやりし、笑うと笑窪^{えんくわ}ができて、弁財天^{べんざいてん}のような色気があった。

天光靈会は大阪南部の某都市にあった。繊維関係で有名な都市で、大阪のタオルは、ここで生産される。中小のタオル工場やだんつ工場が多い。街には数千人の織娘^{おりむすめ}がいた。

街の背後は泉南^{せんなん}の山々で、西側は海である。市街はそのような小産業都市にふさわしく、がさがさして、どんな道にも三輪トラックが走り回っている。だが市街から出ると田畑で、百姓家が点在してのどかな田園風景になる。

市の中心部には国道が走っており、これは大阪と和歌山を通じている。天光靈会は街はずれの小さな丘の上にあった。新しく建てたもので、天光靈会という大きな看板が掛かっている。六間ほどあり、遠くから来た信者たちが泊まる部屋もあった。

教祖の小川良乃が神殿に現われるのは午前十時で、信者たちは早く来ないと、朝のうちにみてもらえない。

天光靈会には、教典から天光靈会の歌、お守りのお札^{おまじ}など、新興宗教らしいものは全部そろっている。

一人の神がかりの女をここまで育てたのは秘書の高倉精一であった。

それより数年前、小川良乃はその街の雑貨店の女房であった。その娘に生まれ店員の喜助^{きすけ}を養子にしたのである。良乃は小学生時代から、ときどき突拍子^{とつぱし}もないことを言って、近所では評判であった。

どこそこに火事があるとか、今度の市長選挙では当選

確實な現市長が落選するとか、そんな予言だが、それが実に良く当たるのだ。高校時代にはそんな予言癖も出なくなっていたが、喜助と結婚してから、ふたたび激しくなった。少女時代と違って卒倒したりする。店先で卒倒し、神がかり的なことを言うのだから、噂になるのが早い。

主人の小川喜助は平凡な商売人で、ただそれが評判になり、店に客が集まるのを喜んでいるような男であつた。

客たちは小川商店の品物を買っては、良乃に占つてもらいたがつた。そのおかげで店は繁盛する。そのうち良乃の予言はしだいに具体的になり、家の方位がどうか、墓相がどうか、専門家じみたことを告げるようになった。

それがよく当たるといふので、小川商店はいつも客が絶えない。客たちはそれが当たるとお礼を持って来る。

小川良乃のことを先生、と呼び出す。熱心な取り巻き信者ができ、先生がお店で品物を売るようないやしいことをされてはいけません、と忠告する。

そんな信者の中に助役夫人もいた。彼女は息子の大学入試を占ってもらいに来て、良乃に家庭教師を変えたな

ら、浪人一年でT大に入学できると言われ、そのとおりになってから、良乃の熱烈な信者になった。

こうなると、実質上主人の地位が逆転するのも当然であらう。喜助は店で品物を売り、時間があれば、良乃の身の回りのことを世話したりする。助役夫人などから、「喜助さんは教祖さまを大切にしなければいけませんよ。生き神さまを奥さんにして、あなたほどの果報者はいませんよ」

こう言われると喜助も、良乃が尊く思える。と言つて現実には、良乃は喜助の細君である。この矛盾に喜助は悩んだ。

小川良乃は有力な信者から、先生と言われたり、教祖さまと言われているうち自分もその気になり、私は普通の人間とは違っていると思ひ始めた。そのうち良乃にとつて喜助は召使的な存在になつてきた。

良乃は喜助との夜の夫婦生活を嫌うようになった。小川喜助が駅前の飲み屋などに毎晩のように現われるようになったのも無理はない。

高倉精一は、小川喜助と駅前の飲み屋で知りあつたのである。

高倉は市の税務課員であつた。家は小さな織物工場で

あつたが、高倉が京都の私立大学に在学中に繊維不況で潰れてしまった。

学生時代の高倉は素行のよくない学生で、下宿屋の娘と関係したり、玉突き屋の女を引っ掛けたり、女関係はルーズであつた。

だが小才は利いており、アルバイトで玩具製造店に、玩具のアイデアを提供したりした。こつこつと働くタイプではない。

そんな高倉が大学を中退して市の税務課員になったのも、女のためである。

この街の金持ちの娘と関係し、彼女の両親がちゃんとした仕事につくなら、という条件で彼女との結婚を許したのである。娘の父親は泉南の山に大きな蜜柑山を持ち、年収千万近い収入があつた。高倉はあつさり大学をよすと、父親の紹介で市役所に勤めたのである。

ところが高倉にとって運が悪いことには、細君は結婚して、一年めに、交通事故で亡くなったのだ。細君は結婚したとき二百万円ほどの持参金を持っていたので、それは高倉のものになったが、細君をひき殺した相手は、ダンブの運転手で保険金以外の金はとれなかった。

親父が亡くなつたら、少なくとも一千万は貰えると高

倉は皮算用していたのである。

だが高倉は市役所をやめなかった。税務課という職場は高倉にむいている。

危ないことはしなかったが、適当に小遣いをくすねるくらいの才能は持ち合わせている。

高倉は肉体ががっちりし、色が白く、ちょっとした好男子である。色が白いくせに胸毛なども生えている。なかなかの精力家で、高倉と関係した女は、みな後を引くが、高倉は女を扱うのがうまく、適当な時期に切つてしまふ。

それはどこか女のような高倉の切れ長の眼に、どうかすると相手をぞつとさせるような冷酷さが現われ、彼に突きはなされると、女たちは文句を言うよりも、なんとなく萎縮してしまふのである。

高倉も田舎町の新聞などで、小川良乃の噂は知っていた。

そして喜助と知り合つた時、高倉は小川良乃を利用して一儲けできないだろうか、と思つた。

高倉は喜助と一緒に小料理屋の仲居と遊んだりして喜助と親しくなつた。

喜助が、女房が教祖になつたことに対して、内心不安

を持つていることも知った。だがそのくせ、女房の名が

あがり、金がたくさんはいるのを喜んでゐることも知った。喜助と良乃の間に子どもはない。一度も妊娠しないというから、良乃は不妊症かもしれない。

「ねえ小川さん。ここまで来た以上、雜貨店なんかしてゐるより、思い切つて宗教に専念したほうがいいですよ。あなたは左うちわだ。だいたい病気をなおして、米を持つて来られたり、五百円くらい貰つたつて仕方ないでしょう。店を売つて新興宗教を始めなさいよ」

こうして、高倉は喜助の紹介で、良乃と会つたのである。高倉は自分の考えを吹き込んだ。一目見て小川良乃は高倉が気に入った。

高倉は亭主の喜助が持つていないような、優雅でたくましい男性的な匂いを持つていた。

天光靈会という名をつけたのも高倉である。こうして小川良乃は、店を売り、天光靈会の教会を建てたのである。

高倉は執事兼秘書になった。市役所のほうはやめてしまった。

高倉は地方新聞の記者に金を握ましたりして、天光靈会の宣伝にもぬかりがない。こういう新興宗教は当たれ

ば算式に信者がふえる。だが単なるお告げだけなら、発展もしてゐる。高倉はむずかしい教理をつくり、天光靈会に威厳を添えた。

年若い女の信者の中から、とくに熱心な女を小川良乃の内弟子にして、巫女のような服装をさせた。

天光靈会の教会が建つてから一年めに、高倉は教会の敷地に、建て増して、そこに住み込んでしまった。渡り廊下で母屋と行き来できる。不思議なもので、小川良乃の身体はますます艶っぽく福々しく、いかにも女の教祖らしい貫録を示してゐる。三十歳を過ぎた小川良乃の身体からは、女の色香が匂つてゐる。

高倉は小川良乃が、自然に自分の手に落ちる機会をじつと辛抱強く待つていた。

小川良乃はあんがい金に対して貪欲である。だいたい教祖になるような女は、金銭などに無縁な顔をしてゐるが、内心は驚くほど執着が強い。それは女教祖という生活が、普通の女性に比べてかなり束縛されるところからくるのだらう。つまり、他の女性のように華やかな服装をして、外出もできない。ダイヤの指輪をしたり、高級な首飾りもつけられない。

もちろん男遊びもできないし、飲み歩いたりもできな

教会の中には内弟子が二人住み込んでいる。良乃も腹の中は煮えくりかえるのだろうが、住み込みの女たちの手前もあり、真つ向から言い争いもできない。

高倉はそのような夫婦間の溝を冷静な眼で眺めて、チャンスを待っていた。

良乃は朝八時に起きる。それから大を連れて庭を散歩する。もうこのころには、泊まり込みの信者たちが庭を掃除している。八時半に食事である。九時には内弟子が御神殿の蠟燭に火をつける。すると泊まり込みの信者たちが、御神殿の部屋にやって来て、天光靈会の教典を口にとえながら、ああ、と異様な声をあげ、畳に頭をこすりつける。

十時前、小川良乃は白衣と赤い羽織に着換える。

高倉から番号札を貰った信者たちは、小川良乃が神殿に現われると同時に、手を合わせて拝む。黒い羽織袴の高倉が、小川良乃より一段下がった場所にすわる。彼の前には、信者たちの献金やお礼を受ける三方が置かれている。

小川良乃が神殿に向きなおり教典をとええる。高倉ももちろん一緒であった。

信者との大合唱がおこる。

喜助も高倉とは反対側の、太鼓の前にすわっている。太鼓を打つのは喜助の役である。

その合図とともに、小川良乃は一人で、わけのわからない文句をとええる。高倉が作ったものだ。その間信者は平伏している。

それが済むと、いよいよ信者たちが待ちに待った、良乃のもったいないお言葉を聞く時間である。信者たちはそれぞれ質問用紙を持っており、それに悩みごとを書き込んで、高倉に渡すのだ。

会員でない者は一つだけ質問が許される。会員は二問まで、特別会員は三問である。

高倉がそれを聞いて読みあげる。質問にはいろいろある。病氣から金儲け、尋ね人とさまだまだ。小川良乃は信者に向かうと、高倉も不思議に思うほど柔和な顔になった。

そして鈴のような声を出す。いつもの良乃の顔や声ではない。

これは小川良乃が信者に向かった瞬間から自己催眠に掛かっているせいかもしれない。

「はい、あなたの足がなならないのは、あなたの御先祖

に悪い人がいて、人を大勢切ったせいです。その人の霊がまだ宙に迷っていて、あなたの足にたたっていますよ。でもあなたの近い御先祖に人を救った方がいます。その人がいなければ、あなたはとくに亡くなっていたはずです。少し長く掛かりますが、悪い霊さえなくなったら、あなたの足はなおりますわ。その方法の一つは、身体障害者の方に、匿名で寄付をなさい。まああまり多くはいりません。あなたの誠意の問題ですよ……」

小川良乃はそのようなことを即座にしゃべる。これはあらかじめ考えていたことではない。

一度高倉は、信者の悩みごとを前もって聞き、いちおう調べてから答えたなら、いっそう当たるだろうと良乃に進言して、失敗したことがある。高倉を信頼している良乃だが、その時だけは眉を逆立て、私の御託宣はそんなインチキではありません、と怒ったのだ。

おそらく良乃は自分の靈感を信じ切っているのだろう。それ以来高倉は、良乃のプライドを傷つけるようなことは言わないことにしている。良乃の御託宣を聞くと信者は、高倉の前にある三方にお札をのせて引き下がる。

この金額は御志おこころざしということになっているが、昭和二十

八年ごろで、普通千円であった。三千円、時には五千元はむ信者もいる。

良乃は昼休みを除き、午後の四時まで、最低二十人に御託宣を下す。一日二万円としても、月に六十万円である。

そのほかに、天光靈会のお札代とか、会費がはいる。だから当時良乃の収入は、月に百万はあったようである。

信者の御託宣が終わると、手紙を書かねばならない。来れない信者のなかには、金を同封し、手紙で良乃の御託宣を知ろうとする。

良乃はこんな場合でも、いちいち眼を通し御託宣をたれる。それを手紙に書くのが高倉の役である。なかには複雑な家庭の事情を書いている手紙もある。高倉もその名を知っているような名士の奥さんが、家庭内の秘密を赤裸々に打ち明けて来る。

高倉は、将来なにかの役に立ちそうなそんな手紙は、ひそかに取っておいた。

良乃はそれが済むと金の勘定をする。それが良乃にとってはひどく楽しみである。

「へえ、木村さんは百円、少ないわね」

そんな時の良乃の顔は、金の亡者である。これが信者の前では、弁財天のような柔和な顔になるのだ。見ていて、高倉も空恐ろしい思いであった。高倉は良乃に洋酒の味を覚えさせた。喜助が飲みに出掛け、一人になった良乃は自分の部屋で洋酒を飲みながらテレビを見る。高倉がいつものこの男に似ず、じっと良乃が自分の手に落ちる機を窺っているのは、良乃に近寄りがたいなにかがあるからである。

普通の女にはない、妖氣じみたものが良乃にあった。神がかり的な良乃の御託宣のなかに、不思議に的中するものがあるのも氣味悪い。そんな良乃が、なんとなく煙たい。自分でお膳立てした天光靈会という異様なムードに、高倉自身毒されていたのかもしれない。

良乃を陥落させる手段として、高倉はそれとなく喜助が女を囲っていることを匂わした。良乃は眼を光らしたが、

「どんな女ですか、それは」
「さあ、私もはつきり知りませんが、噂によりますと、料亭の仲居だということです」

すると良乃は齒ぎしりした。きりきりという嫌な音が、すわっている良乃の口から洩れる。高倉はぞつとし

た。たしかにこの女には、普通の人間にない妖氣がある。なにか怖ろしいことが起こりそうな氣がして、高倉はそれきり喜助のことは告げなかった。

だが良乃は忘れていなかった。ある日、それは予想もつかない結果となって現われた。

いつものように信者の一人が、良乃の御託宣を受けようと平伏していると、とつぜん良乃が口から泡を吹いたのである。眼をつり上げて苦悶の形相をしていたが、

「この男には悪い女がいる。それが私のお告げの邪魔をする。不浄者、下がりなさい」

はつたと喜助を睨んだのである。喜助は呆然としていた。良乃は喜助を指しながら、汚れた女じゃ、汚れた女じゃ、と言い続けた。信者たちの間に動揺が起こった。

喜助は信者たちの怒りと憎しみの眼を受けて、あやつり人形のように神殿から去った。

天光靈会は良乃のもので、喜助は亭主というよりも寄生虫にしかすぎなくなっていたのである。

小川喜助が銀行から数百万の金を引き出し、女を連れて失踪したのは、それから一週間後であった。

それは良乃にとっては、相当なショックだったようであった。

高倉が待つていたチャンスがやって来たわけだ。

ある日高倉は、良乃にこの日曜は、気晴らしに旅行でもされたいかがですか、とすすめた。日曜日の昼から出掛けて、月曜日の昼戻ってくればよい、と言った。

下働き代わりに住み込んでいる信者の娘一人と、高倉がお供をすることになった。

あまり遠くへは行けないので、南紀の白浜に決めた。良乃は久しぶりの旅行なので、上機嫌である、高倉にどんな着物を着たらよいか、と相談したりする。

高倉と良乃は一等に、内弟子は二等に乗った。この若い娘は八重子^{やえこ}といって、大きな農家の娘である。色は黒いが眼鼻立ちは整っている。二十歳であった。

高倉は良乃と関係してしまったら、二人の内弟子も自分のものにしたい、と思っている。口を塞ぐためでもあり、いろいろな面で都合がよい。

部屋は三部屋とった。その日は三段壁^{さんだんかき}や白い砂浜などを歩き、夜旅館に戻った。

当時の白浜は風紀が悪く、至るところにヌードスタジオがあり、ぼん引が出没している。

三人一緒に食事をして、酒など飲み、各自が部屋に引

きあげたのは十時過ぎである。

丹前姿の良乃は眼元^{めもと}をあからめ、孤闇^{こやみ}の肌が杓元^{さくもと}から袖口から匂ってくるようである。女盛りなのだ。

あまり運動もせずに栄養だけはすごくよい。その肌には脂^{あぶら}がにじんでいる。十一時過ぎ、高倉は良乃の部屋を訪れた。入口には小石が敷かれ笹など植えられている。

ドアのノブを回すと、鍵は掛かっているらしくすぐ開いた。

寝室には行灯形式のスタンドがぼんやり部屋を照らしている。

襖^{ふすま}をそと開けて、高倉は息を呑^のんですわり込んだ。

良乃が蒲団^{ふとん}にすわり、黒い眼を見張って高倉のほうを眺めている。旅館の浴衣姿である。こうなった以上度胸を決めるより仕方がない。高倉は膝^{ひざ}で這^はうようにしてなかにはいった。後ろ手に襖を閉めると、良乃の傍^{かたわら}らにいきり寄った。

「許してください。僕は始めて会った時からあなたが好きだったんです」

すると良乃は相変わらず高倉を見詰めたまま、

「私はあなたが今夜来るのを知っていました。天光靈の神にお尋ねしたら、喜助も去ったし、かまわないという

お告げだったので、こうしてあなたを待っていました」
その言葉は自信に溢れてゐる。高倉は自分のものがな
えて行くような気がした。

だが思い切つて蒲団に上がると良乃の肩を抱いた。良
乃は大きな吐息をつくと、包むように高倉を抱き蒲団に
倒れた。

高倉の手が良乃のすべすべした乳房を掴んだ。良乃は
さっきの自信たつぷりの言葉に似合わず、興奮にあえぎ
ながら、やたらに高倉に身体をこすりつけてくる。重い
豊かな身体であつた。その夜、良乃は長い間抑圧されて
いた女の本能をあますところなく、高倉にぶつつけてい
る。朝方、高倉はへとへとになつて自室に戻つた。

良乃と関係したことは、高倉の誤算であつたかもしれ
ない。

良乃はそれ以来、機会あるごとに高倉を求めてきた。

高倉の部屋と良乃の部屋は離れてゐるが渡り廊下でつな
がっている。良乃は毎晩のように高倉の部屋にやつて来
る。始めのうちこそ高倉は、脂が全身ににじんだ良乃の
身体をむさばり、肉欲の中に耽溺したが、毎夜、三月も
四月も続くと、良乃を持てあまし始めたのも無理はな
い。

それに良乃は、高倉とそんな関係になつてからも、金
銭に対する執着はいっこうに減らない。集まつた金は、
みな自分の手で銀行に預けなければ承知しない。喜助に
持ち逃げされてからとくにひどい。

高倉がこの間、良乃を口説いて成功したのは、自動車
を一台買ったことだけであつた。こんな二人の關係が秘
密を保てるものではない。信者たちの間で、良乃と高倉
の關係は公然の秘密のようになってしまつた。

だが新興宗教というの不思議な世界だ。そのために
信者が減るといふことはない。

良乃の御託宣にも相変わらず御利益があつた。ただ良
乃は、天性の勘で、高倉がいささか自分を持てあまして
いるのを感じてゐる。

高倉の身体の上でのたうち存分に汗を流したあと、潤
んだ眼で、

「あなたは私から離れられないわよ、いい？ もしあな
たが喜助のようなことをしたら、私はあなたに天罰を下
します。私にはその力があります」

と言つて高倉の身体をつねったりする。

良乃に欲望を吸い取られ、ぐんなりしている高倉の身
体は、心の底まで縮むようであつた。

良乃が高倉の部屋に立派な風呂をつくった。総檜造り
でたいしたものである。

良乃は驚くほど体力が旺盛で、どんなに激しい営みの
あとでも、風呂にはいり、高倉の身体をマッサージした
りする。マッサージされながら高倉は疲れ果てて眠りこ
ける。

喜助に数百万の金を持ち逃げされて以来、良乃は判と
通帳は自分の傍らから離さない。

こうして半年たった。

このまま行けば、高倉は良乃のために殺されてしまい
そうである。高倉の顔は青白く生気がない。朝、信者の
前でじっとすわっているのが苦痛であつた。肩が下が
る。

だが良乃のほうはますます艶々しく、信者に御託宜を
たまわる声は秋の虫のように涼し気である。高倉はそん
な良乃に憎しみさえ覚えた。

自分もチャンスを狙い、判と通帳を奪い、金を引き出
し、喜助のように逃げたい、と思う。だが考えてみれ
ば、そんな方法が一番ばかげた手段である。

高倉は良乃と結婚しよう、と思った。

正式に結婚すれば、良乃が亡くなったらその財産は高

倉のものになる。ところが良乃は結婚には反対するの
だ。信者にとつても、独身のほうがありがたく見えてよ
い、と言う。

特別会員であつたS市出身の代議士杉岡田が、小川良
乃に接近して来たのは、そのころであつた。

細君の玉代が信者で、連れられてきたのである。

杉岡田はS市で建材店を経営して、大阪その他にも支
店があり、手広く商売をやっている。当時は四十歳を過
ぎたばかりだが、精々顔で額が禿げ上がり、五十前後に
見えた。

親父は亡くなったが、S市の市会議長にまでなった、
政治屋である。その影響か、杉岡田は大学を出た翌年、
二十五歳で衆議院に立候補した。二度落選し、三十四歳
で始めて当選した。若手議員である。

そしてその当時までに、二度も当選している。S市に
おける民本党支部の青年部長で、今度当選すれば、次官
クラスになれるそうである。天光霊会への寄付も大きい。
宣伝の面でもいろいろバックアップする。

自然、高倉とも親しくなった。

杉岡田は良乃や高倉に、天光霊会をS市に持ってくれ
ばよい、と言う。